

THE ORK MAN IS HERE

オークマン参上

丸文ウエスト株式会社
代表取締役社長
藤原 忠氏



笑顔が苦手とおっしゃっていたが、お話の間中、柔和で多彩な表情に溢れていた。グローバルで折衝が多かった表情は言葉以上に人の心を惹きつける。

豊富なバリューチェーンを通じ 理科学機器専門商社として 新たな価値を提案し続けていくことを 目指します。

今回、伺ったのは神戸に本社を置く丸文ウエスト株式会社。理科学機器の専門商社である。親会社である丸文株式会社の神戸支店から分社・独立する形で2005年に誕生。2008年には姫路営業所、さらに2015年には香川県高松市に四国営業所を開設し、瀬戸内海ベルト地帯の企業にきめ細かな営業を展開している。今回は同社を率いる藤原忠代表取締役社長を辻広報委員長と先ごろ広報委員の一員となった吉田副広報委員長が尋ねた。



本社入口。接客スペースとオフィススペースは完全に分離されている。多くの大企業と取引があるため情報セキュリティをきちんと確保している。

主として兵庫県を拠点に 島津製作所の代理店として 社会貢献する企業です。

—オミクロンによる第6波が思わぬ大きな波で、今年も多難な幕開けとなってしまいましたが、このような時にインタビューをお受けいただき、感謝しています。

藤原 役員会もウェブの時代で、私もこの2年ほどで親会社の本社がある東京に参りましたのは2回ほど。テレワークが予想以上のスピードで進んだのは喜ぶべきことではありますが、あらゆる制約にがんじがらめになっている今の状況は営業活動を狭めているだけではなく、特に若い人のストレスが大きくなっていると危惧しています。

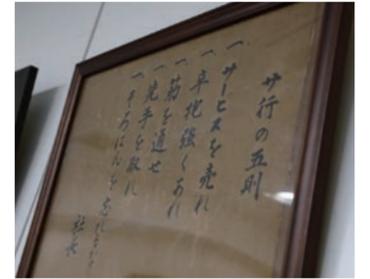
—そうですね。従来のような形に戻るとは思いませんが、この閉塞した状況はそろそろ打破しなければなりませんね。成果だけで業績や能力を判断する欧米とは違い、人材を育てることに重きを置く日本企業には痛手の2年でした。特にこの2年間に入社した若手は非常に不安な時期を過ごしたのではないかと思います。藤原 世間ではテレワークで人が動かず、また事務所は小さくて済むので

経常利益は良くなったという結果が出ていますが、やはりこのままではまずい。新しい動きに転じる時期に来ていると実感いたします。

—御社は神戸を本社に2005年に設立と伺っていますが、元々は創業178年になるとも歴史ある企業だそうですね。

藤原 親会社の創業は1844(弘化元)年。1868年が明治元年ですから江戸の末期に、東京日本橋で丸文の屋号で呉服屋を創業し、後に生糸の輸出入や洋反物の輸入に携わったと聞いています。戦後の昭和22年に丸文株式会社を設立。戦後間もない時期から株式会社島津製作所の代理店として理科学機器を大手民間企業や大学・官公庁へ営業展開し、販売してきました。1948年に京都支店神戸出張所が開設され、1952年には神戸出張所が神戸支店に昇格しています。2005年に神戸支店が分社独立し丸文ウエスト株式会社が設立され、2008年に姫路営業所、2015年に四国営業所が香川県高松市に開設されました。高松は県庁所在地でもあり、今後、瀬戸内海ベルト地帯での営業展開に利すると思ったからです。

—確か北陸にある丸文通商さんに



(写真上)壁にかかっていた「サ行の五則」。紙の古さからして1947(昭和22)年、丸文株式会社が設立された頃のものか。(写真下)丸文株式会社が設立された翌年1948年から株式会社島津製作所の代理店となった。同社は2002年にノーベル化学賞を受賞した田中耕一さんが所属する。昨今はヘルスケア分野に進出している。

当社のマントルヒーターを扱っていたという時期があったように思いますが、丸文通商さんとは兄弟会社と言うことでよろしいのでしょうか。藤原 はい。丸文株式会社を親会社に金沢に本拠を置く丸文通商株式会社、そして神戸に本拠を置く当社、そしてサービス会社フォーサイトテクノ、さらにワールドワイドに世界の約50拠点で事業展開をしています。



社長秘書の佐藤さんからスケジュールなどの説明を受ける藤原社長。藤原代表取締役社長を挟んで、(右)辻広報委員長、(左)吉田副広報委員長。今後、一人でインタビューにあたるために吉田副広報委員長は現場の様子を覗きにいられた。

THE ORK MAN IS HERE

オークマン参上

連結売上高は約3000億円、エレクトロニクスの専門商社として3000社を超えるお客様に500社以上の仕入先からの製品やサービスを提供しています。中でも私たちは地域に密着し、細やかな事業展開を目指しています。グループ全体として売上の80%が今再び大きな話題を呼んでいる半導体が占め、20%はシステム事業と呼んでいる産業機器関係を扱っています。ここは島津さんの代理店から出発したということもあり、産業機器分野、つまり理科学機器を扱っています。

地域に密着した サポート体制を確立し 日本の未来に貢献したい。

—御社は2005年設立と言いますと藤原さんは何代目の代表ですか。
藤原 3代目です。2011年4月に代

表として着任し、約10年になります。
—東北での震災の年ですね。
藤原 私は元々神戸で生まれ育ちましたから終盤を神戸に帰って来られたのは嬉しかったですね。丸文への入社が決まって以来、東京赴任や関西支社勤務で主に大手電機メーカーを担当していました。
—担当はやはり半導体ですか。
藤原 はい。外資系の半導体を仕入れて日本企業に提供するのが私のミッションでした。当時はアジアに生産拠点を移す企業が多かったので、海外、特にアメリカですが、ヘッドクォーターの製品をアジアの日本現地法人に納入するのが多かったですね。
—半導体から理科学分野への移行に戸惑いも大きかったのではないですか。
藤原 確かに。まずビジネス規模が違うので頭の切り替えに少し時間がかかりました。半導体は投資をして回収していく事業です。その額が多額なので、いろんな意味で厳しい部分がありましたが、やり甲斐も感じていました。一方、理科学は地道さが求められ、また、私はトップに立つ立場に変わり、あらゆる場面で決断を迫られますから重責を感じます。

—話がそれますが、半導体はかつて世界に先んじていた日本が台湾や韓国に大幅な遅れをとってしまいました。ここにきて今一度艇入れをしようとしています、そのような現状をどう思われますか。
藤原 半導体は産業の米と言われていた時代があったのに、若い力ある研究者や技術者を大事に育てなかった結果が、今ではないかと思っています。賃金体系然り、大袈裟ではなく、この現状を放置していたら世界との格差が広がってしまうと、私は思っています。大事なことは目の利益に終始せず、将来を見据え、若い人材を育て、技術へ投資していくことだと思います。そして組織のトップにいる者は、果敢な決断力を持つことです。

若い技術者や 研究者を育てる。 それが未来へと進む道。

—長い丸文さんの歴史の中に組み込まれたDNAに「道を拓き、先駆けること」という企業精神があると伺いました。また、創業者の堀越角次郎翁は「天は人の上に人を造らず、人

の下に人を造らず」の福沢諭吉と親交が深かったと聞きました。
藤原 慶應義塾大学の創立も支援したとも言われています。明治という新しい時代を迎えて、人材や技術を育てることがいかに大事かを考えていたのでしょう。その想いは今も受け継がれていて、あまり知られてはいないので、私が大きな声で言うのは憚られますが、1997(平成9)年に一般財団法人丸文財団(旧財団法人丸文研究交流財団)を設立し、大学や国立研究機関の若手研究者の研究交流助成・支援活動を行っています。新たな産業を創出し、創造的な技術開発を推進するために、例えば昨年ですと「集積エレクトロニクス及び情報システム応用」「光エレクトロニクス」「先端デバイス・材料及びシステム」「エネルギー・環境エレクトロニクス」「バイオ・医用エレクトロニクス」といった技術分野へ公募をかけ、4名の表彰者、21名の研究助成金受領者が決定しました。2000(平成12)年の丸文学術賞は天野浩名城大学工学部教授が受賞されています。後に先生がノーベル物理学賞を受賞されたときは、それは嬉しかったです。
—多くの優れた研究者が海外に流出してしまう現状を見ていると、母

国で研究に励むことができる環境を作ることはとても意義あることですね。
藤原 本当にそう思います。ただし、丸文財団では日本人に限らず、日本に留学できている優れた研究者も対象としています。財団の存在意義として、広い視野から技術や研究成果を眺めることは大事だと思いますね。
—昨今は海外との行き来がかなり制限されていますが、ストレスはありますか。
藤原 正直に言いますと、私は若い時から10年ほど前まではアメリカやアジアを行き来する生活だったので、「海外はもういいかなあ(笑)」と思っています。
—お忙しく海外を飛び回っていた方は確かに「もういいかなあ」と言われる方は多いですね。しかも社長業の方には休日は独りでポツと過ごしたいという方が多いですね。
藤原 私も好きですね。ゴルフはストレス解消と運動不足にはもってこいだと思います。また3月に株式会社島津製作所が西郷真央選手とスポンサーシップ契約を結び、初戦ツアー初優勝を飾りました。どの業界においても若手が台頭してくることを嬉しく思います。



丸文グループの一般財団法人丸文財団は1997(平成9)年、集積エレクトロニクス、光エレクトロニクス、先端デバイス・材料、システムなどの技術分野の若手研究者を対象に支援を目的として設立された。

—最後に、このコロナもそろそろ出口が見え始めると思いますが、今後に向けて一言お願いします。
藤原 当社は地域に根ざした営業展開をしていく姿勢に変わりはありません。ただ、心がけたいのはストレスが溜まりに溜まっている若い人材に力を発揮できる場を作っていきたい。そして若い人には閉じこもらず、外に向かって欲しいですね。そのためにはブローケンでいいから英語にチャレンジするとか、情熱を持って何かに臨んで欲しいですね。制約が外れるコロナ後こそ、企業も自分も働き方が変わるチャンスなのかもしれません。
—今日は貴重なお時間をいただき、ありがとうございました。

丸文ウエストは神戸の海岸通りに面したビルにある。六甲の山並みを仰ぐようにして神戸の街にはユニークな建築が連なっている。

